

教 育 評 価 報 告 書

(平成13年度着手分)

新潟大学大学院医学研究科

平成14年4月

新潟大学評価委員会

対象組織の現況

研究科名 医学研究科

専攻名 生理系専攻，病理系専攻，社会医学系，内科系専攻，外科系専攻

学生総数 定員 280 人

現員 273 人

教員数	医学研究科	附属腎研究施設	附属動物実験施設
教授	33	3	
助教授	30	3	1
講師	18		
助手	55	2	1

教員数	医学部附属病院	脳研究所
教授	3	8
助教授	8	8
講師	28	
助手	81	14

教員総数

教授 47

助教授 50

講師 46

助手 153

計 296

(平成 12 年 5 月 1 日現在)

教育目的及び目標

医学研究科の理念

本研究科は先端的ならびに基盤的医学研究，先進医療を進めると共に，これらの医学・医療を担う次世代の研究者，高度職業人の養成を図り，これによって人類に貢献することを使命とする。

近年の生命科学の著しい発展に伴って，医学・医療の直面する課題は増加しつつある。先端医療を開発・実施するための諸問題，環境変化，少子高齢化など社会の変化に伴って生じた多くの医療課題，情報化社会に対応した医療の効率化・高度化など今日的医療課題は枚挙にいとまがない。今後も新たな医療課題は次々と出現し続けると考えられる。これらの今日的医療課題を解決できる研究者，医療人を育成することが大学，大学院の大きな役割である。医学部が基盤的教育の充実，基礎技術の訓練を主として担うのに対して，大学院は学部教育を基礎として，その上に境界型教育・研究に重点をおいた教育を行う。境界型教育・研究には先進的学際分野における教育・研究，いわゆる探索的臨床研究（translational research）などの臨床応用研究を含む。教官自体が広い視野と高い研究レベルを維持するとともに，今日的医療課題の解決を図るだけの見識と力量を備えた人材育成を担う。

以上を鑑み，本研究科教官は自ら先端的・基盤的生命科学研究，境界型研究に邁進するとともに，「科学全般にわたる視野」と「医療に対する情熱と動機」を次世代の優れた研究者・医療職業人に伝え，これによって我が国はもちろん，世界の医学・医療に寄与しなければならない。

医学研究科の目標

本研究科の第1の目標は，医学研究者の養成である。

本研究科教官が広い視野と高い研究レベルを持ち，成果を社会に還元することは当然であるが，その研究活動を引継ぐ優秀で強い動機を持つ研究者を養成することは重大な責務である。これらの研究活動には先端的生命科学のみならず，医学研究の場と医療の場を密接に連携させる，いわゆる探索的臨床研究を始めとする臨床応用研究が重大な分野として含まれる。

第2の目標は，高度医療職業人の養成である。

今日的医療課題を解決するためには，高度の専門性と共に，隣接領域について深い理解

を持った医療職業人の養成が不可欠である。これらの高度医療職業人の教育は探索的臨床研究の場を活用することが重要であり、柔軟で且つ実践面で力量を持つ境界型の医療職業人養成を効果的に進める努力を続ける。

第3の目標は、国際的視野に立つ社会医学・医療領域の専門的職業人の養成である。本学のグローバルな地域的特性を配慮しつつ、今日の多様性を持つ社会医学・医療分野に求められている保健・医療、福祉、厚生・環境行政、医療経済、医療情報等における高度な知識や実践能力をもち、且つ国際的視野に立つ専門的な職業人の育成を図る。

この3つの目的、すなわち、先端医学を踏まえた学際的研究の発展、ならびに高度の専門性を持った全人的医療職業人の養成は同等の優先順位を持つ。

医学研究科の施策

この目標を遂行するために医学研究科・歯学研究科は生命科学を軸とした統合研究科として再編し、もって大学院の高度化を図る。統合研究科は自然科学研究科をはじめ、理・工・法・経済・人文学部、脳研究所等との連携を図り、総合大学として持つメリットをフルに生かしたい。新しく部局化された大学院は従来の基礎・臨床医学が分離した組織とは異なり、両者を統合した専門別専攻を持つ。さらに、これに加えて専攻を越えた時限的プロジェクトにも重点を置くことにより、有機的な学際研究を組織化する。

本学は先端医学研究者、高度職業人の養成とともに、地域医療の基軸となる医師の養成に責任を負う。従って、統合研究科における教育研究と共に、学部教育の充実にも重点を置くことが必要である。教官は大学院が本務となるが、学部教育を担う学部教官を兼任する。

これらの教官の教育動機は教育高度化プログラム（Faculty Development, F D）の施行、教官再任・昇任に際しての教育実績重視などによって高める。一方で、系統的なカリキュラム改革により従来、講座ごとに行われてきた学部教育の重複を省き、明治以来の教育体系の刷新を図ること、教官の適材適所の配置を図ること、ティーチングアシスタントを活用すること、教育設備・教材製作機器の整備など教育環境の改善などの諸改革を通じて学部教育・大学院教育を共に重点化するために生ずる教官負担の軽減を図る。これらの施策により、大学院部局化により成就される境界型教育・研究のメリットを学部教育に生かす。

これらの大学院改革は従来 本研究科で行われてきた学際研究を再編成することにより、運用上なされていた境界型教育・研究の組織化・効率化を図るものである。さらに大学院充足率の向上を図るとともに、社会人入学制度を拡充し開かれた大学院を目指す方策を進

(医学研究科)

めつつある。

これらの改革を進めるために研究基盤の拡充整備が必要である。共同利用機器の整備拡充、動物実験施設整備等を行いつつあるが、特にトランスジェニック動物の管理維持施設の改善は急務であり、現在その拡充を進めている。

項目別評価結果

1. アドミッション・ポリシー（学生の受入方針）

ここでは、対象組織における「アドミッション・ポリシー（学生受入方針）」の算定及び周知・公表状況やその方針に沿った「学生受入の方策」の実施状況を評価し、特記すべき点を「特色ある取組、優れた点」、「改善を要する点、問題点等」として示し、教育目的及び目標の達成への程度を「貢献の状況（水準）」として示している。

特色ある取組・優れた点

医学研究者の養成、高度医療職業人の養成、国際的視野に立つ社会医学・医療領域の専門的職業人の養成を目標にしている医学研究科にとって、大学院定員の充足は重要である。このためにはまず志願者を増加させなければならないが、専攻分野の入学者枠にとらわれずに、入学に値する者すべての入学許可、平成11年度からの社会人特別選抜制度の導入、留学生の大学院入学の増加、年2回の選抜などにより志願者が増加して、入学定員が100%を超えるようになったことは評価できる。

改善を要する点・問題点等

大学院学生の選抜にあたり専攻分野への強い動機と、その領域への高度の知識を持つ、志望する研究への将来展望がしっかりした学生を選抜して、援助・養成していく必要があると述べているが、その方法は平成13年度設置の大学院医歯学総合研究科での検討ということのようにあり、今後にもむけて早急な検討が必要である。

志願者が入学定員を超えるようになり、臨床系専攻分野に優秀な学生の確保が可能となり、努力が認められるが、基礎系専攻の定員充足率は依然として低く、基礎系専攻分野の志願者の増加のため、医学研究科だけで解決できないものも多く、いろいろ難しいことはあるだろうが、学部学生への働きかけなど努力して欲しい。

貢献の状況（水準：7）

入学定員が充足され、外国人や社会人の入学もあり、努力が成果として現れつつあるが、基礎系の入学者の不足や入学資格・修業年限の弾力化の問題もあり、平成13年度設置の大学院医歯学総合研究科でのさらなる改善を期待したい。

(医学研究科)

2. 教育内容面での取組

ここでは、対象組織における「教育課程及び授業の構成」が教育目的及び目標に照らし、十分実現できる内容であるかを評価し、特記すべき点を「特色ある取組、優れた点」、
「改善を要する点、問題点等」として示し、教育目的及び目標の達成への貢献の程度を「貢献の状況(水準)」として示している。

特色ある取組・優れた点

臨床医学研究と基礎医学研究の連携が重要となってきたことを考慮し、臨床系大学院生を基礎系講座に2年間派遣し、基礎医学系の指導教員と連携した研究指導体制をとっていることは、基礎研究の推進に極めて重要な役割を果たしている。基礎系大学院の入学者が少ない状況の中で、基礎研究に興味を持たせ、基礎の研究者としてやってゆきたいと考える大学院生を増やす意味でも評価できる。

改善を要する点・問題点等

臨床系大学院生を基礎系講座に2年間派遣し、基礎医学系の指導教員と連携した研究指導をしていることは評価でき、これが基礎研究の推進に極めて重要な役割を果たしていることは特色ある取組で優れた点であるが、目標に掲げた3つの目的、医学研究者の養成、高度医療職業人の養成、専門的職業人の養成のうち、専門的職業人の養成では、必ずしも大学院4年間のうち2年間を基礎系講座に派遣しなくてもよいのではないだろうか。

教育内容面での取り組みでは、大学院教育といえる体制にはなく、多くの場合各講座の運営に任せられ、総合的な対応とはなっていない。教育実態の把握や質の向上、改善のためのシステムづくりなどにも早急に対応すべきと思われる。

貢献の状況(水準:6)

平成13年度からは、医学部全体が大学院部局化し「大学院医歯学総合研究科」として新しいスタートとなっている。大学院教育への抜本的な見直しがおこなわれているようであるが、その成果に期待したい。

3. 教育方法及び成績評価での取組

ここでは、対象組織における「教育方法及び成績評価法」が教育目的及び目標に照らし、適切であり、教育課程及び個々の授業の特性に合致したものであるかを評価し、特記すべき点を「特色ある取組、優れた点」、「改善を要する点、問題点等」として示し、教育目的及び目標の達成への貢献の程度を「貢献の状況(水準)」として示している。

特色ある取組・優れた点

博士課程における教育研究は、極めて高度化、専門化してきており、教育研究の内容によっては、他大学大学院等の施設・設備の利用や、専門の研究者の助力を得ることが有益であると考えられている。医学研究科においても高度、かつ、先端的研究を遂行する上で、一時期、本研究科以外の場で研究指導を受ける必要のある学生については、特別研究派遣学生として外国を含む他の大学・大学院に積極的に派遣している。また、他大学からの要請についても、特別聴講学生や特別研究学生として積極的に受け入れて、7年前と比較すると実に交流数は3~5倍になっている。このことは、大学院における教育研究の多様化、活性化として大いに評価できる。

教授有志による研究の中間発表会「みかんの会」で、基礎系の大学院在生を中心に活発な質疑が行われ、いろいろな視点からの意見交換がおこなわれて、研究成果のまとめに役立っていることは、独創性に富み、国際的にも評価される先進的な研究を遂行させる上で有効とおもわれ、評価できる。

改善を要する点・問題点等

臨床系大学院生を基礎系講座に2年間派遣し、基礎医学系の指導教員と連携した研究指導体制をとっており、この体制は基礎研究の推進に極めて重要な役割を果たしていると述べているが、大学院学生にとってその成果はどのようなものなのかがよく分からない。

貢献の状況(水準:6)

基礎系講座に2年間派遣し、基礎医学系の指導教員と連携した研究指導体制をとっていること、他大学からの入学生の多いこと、外国を含めた他大学との交流など評価できることは多いが、改善すべきことも少なくない。

(医学研究科)

4. 教育の達成状況

ここでは、対象組織における「学生が身につけた学力や育成された資質・能力の状況」や「卒業後の進路の状況」などから判断して、教育目的及び目標において意図する教育の成果がどの程度達成されたかについて評価し、特記すべき点を「優れた点」、「改善を要する点、問題点等」として示し、教育目的及び目標の達成の程度を「達成の状況(水準)」として示している。

特色ある取組・優れた点

この項の報告内容のほとんどが、現状への反省と改善の提案であり、素直に現状の問題点を明らかにして、改善したいという意欲が感じられる。

改善を要する点・問題点等

4年間で学位を取得した学生の割合が低下傾向にあり、6年以上かかった学生も増加傾向にあるにもかかわらず、原因が解明されていないのは問題であろう。3年間の学位取得の問題を含めて、改善の努力をする必要がある。

報告書では、学位の合否基準は他大学と比較してかなり甘い、学位論文の要旨を新潟大学学報で公表しているが、読まれることはないのも、その意義は疑問であるなど、現状に対する批判的な記載が多く、4年間で学位取得ができない学生の増加など、改善すべき問題がかなり多い印象を受ける。

達成の状況(水準:6)

問題点を報告書に自らが書いており、改善したいという意欲がみられるので、改善に大いに努力して欲しい。

5. 学生に対する支援

ここでは、対象組織における「学習や生活に関する環境」や「相談体制」の整備状況や「学生に対する支援」が適切に行われているかを評価し、特記すべき点を「特色ある取組、優れた点」、「改善を要する点、問題点等」として示し、教育目的及び目標への貢献の程度を「貢献の状況(水準)」として示している。

医学部の報告と同様のものが多いので、ここでは特に大学院に関係ある部分を除いて評価は行わない。

特色ある取組・優れた点

報告書の中に、研究科独自の優れた支援についての記載はなかった。

改善を要する点・問題点等

奨学金では「奨学金制度に基づいた経済的支援は適切に行われているものと思われる。」、授業料の減免では「積極的に授業料減免に関する経済的支援が行われているものと思われる。」、生活相談では「保健管理センターの相談室も適宜利用されている。」「学生教育研究災害傷害保険制度も、平成12年度には7割以上の大学院学生が加入するようになってきている。」、就職、進学では「大学院修了後の就職についても、非常に高い成果が得られている。」、「就職相談・指導についても成果が上がっているといえる。」と書いているが、自己評価のレベルでは5のあまり努力していない点数がつけられている。これは、研究科独自の支援は難しく、実際にはあまり出来ていないことを自覚しているものと思われる。

大学院修了後本学附属病院に残る者が少なく、大多数が学外病院に就職している状況であり、この原因のひとつに、専門分野ごとに設けられている専門医(認定医)制度を挙げ、大学院での学位取得後は、専門医(認定医)となるための実地研修を要請されることが多いようだとしているが、これには臨床系大学院と専門医(認定医)制度との整合性の問題など、我が国の医系大学院のあり方そのものの問題もあるので、メディカルスクール構想も含めての根本的な検討が将来的に必要となろう。

貢献の状況(水準:6)

大学院生の生活を安定させ、研究に専念させてやりたいという気持ちが報告にも強く出ているが、奨学金など研究科だけでは解決できない問題が多く、難しい状況ではあると思う。しかし、学生の増加のためにも、就職や生活相談など研究科として対応できることは、組織としての対応を検討して欲しい。

(医学研究科)

6. 教育の質の向上及び改善のためのシステム

ここでは、医学研究科として「教育の質の向上及び改善のためのシステム」が整備され機能しているかについて評価し、特記すべき点を「特色ある取組、優れた点」、「改善を要する点、問題点」として示し、システムの機能の程度を「機能の状況(水準)」として示している。

特色ある取組・優れた点

平成9年度から行われている「新潟大学医学教育ワークショップ」は、学部学生の教育改善が主目的であるが、大学院教員も参加しており、教員の意識改革の面で大いに役立っているものと思われる。

改善を要する点・問題点等

教員の教育活動の評価は、組織としての教育活動評価及び教員個々の教育活動評価の必要性を感じて検討が始まっているが、未だその実現には至っていないが、早急実現できるように努力している状態である。教育活動の評価は、教員の大学院学生への指導意欲に関係し、教員の任期制の問題も出てきているので、早急に教育活動の評価ができるシステム構築の努力をして欲しい。また、これには教育活動のデータベースを作成しないと、教育業績の評価は行えないので、これが行えるシステムも必要である。

教育改善へのフィードバックシステムでは、カリキュラムの運用や見直しなどについては、研究科専門部会が責任を持っているが、フィードバックシステムとしての働きは不十分である。

機能の状況(水準：4)

新潟大学医学教育ワークショップは教員の意識改革において役立っているが、研究科として独自の教育の質の向上及び改善のためのシステムについては、確立されたものはなく、教育活動の評価をはじめ、システムの確立のための計画から検討する必要がある。

総合的評価結果

新潟大学医学研究科は先端的ならびに基盤的医学研究，先進医療を進めると共に，これらの医学・医療を担う次世代の研究者，高度職業人の養成を図り，これによって人類に貢献することを使命としている。大学院は学部教育を基礎として，その上に境界型教育・研究に重点をおいて教育を行う。これには先進的学際分野における教育・研究，いわゆる探索型臨床研究（translational research）等の臨床応用研究を含んでいる。

このような医学研究科にとって，大学院定員の充足は重要であり，志願者の増加のために，専攻分野の入学枠にとらわれない入学許可，社会人特別選抜制度の導入，特別選抜による留学生の大学院入学の増加，年2回の選抜など，さまざまな努力により志願者が増加して，入学定員の充足率が100%を超えるようになったことは評価できる。

また，臨床医学研究と基礎医学研究の連携が重要となってきたことを考慮し，臨床系大学院生を基礎系講座に2年間派遣し，基礎医学系の指導教員と連携した研究指導体制をとっていることは，基礎研究の推進に極めて重要な役割を果たしている。基礎系大学院の入学者が少ない状況の中で，基礎研究に興味を持たせ，基礎の研究者としてやってゆきたいと考える大学院生を増やす意味でも評価できる。しかし，この試みは，派遣される学生の立場からみて有効かどうかの評価も必要であり，組織としての評価が必要と思われる。

教育内容面での取り組みでは，大学院教育といえる体制にはなく，多くの場合各講座の運営に任せられ，総合的な対応とはなっていない。教育実態の把握や質の向上，改善のためのシステムづくりなどにも早急に対応すべきと思われる。

4年間で学位を取得した学生の割合が低下傾向にあり，6年以上かかった学生も増加傾向にある。この原因については記載がないが，時代の要請がある3年間で学位取得の問題などを含めて，改善の努力をする必要がある。

報告書では，学位の合否基準は他大学と比較してかなり甘い，学位論文の要旨を新潟大学学報で公表しているが，読まれることはないのも，その意義は疑問であるなど，現状に対する批判的な記載が多く，4年間で学位取得ができない学生の増加など，改善すべき問題がかなり多い印象を受ける。これらを組織としてどのように対応して改善してゆくのかが，早急に検討する必要があるのではないかと。

平成13年度から大学院医歯学総合研究科（大学院部局化）が開始され，既存の医学研究科は大きく組織が変わる。そこでは，基礎系と臨床系の区別の解消とともに学際的な研

(医学研究科)

究にも着手することができる。

新しい大学院医歯学総合研究科では、本報告に記載されたさまざまな問題点を解消し、新しい研究分野にも対応してゆくためのシステムを作り、医学研究科をさらに発展させた大学院を作り上げるよう努力して欲しい。

評価結果の概要

1. 項目別評価の概要

1) アドミッション・ポリシー（学生の受入方針）

社会人特別選抜制度の導入など努力して入学者が100%を超えるようになったことは評価できる。しかし、基礎系の入学者の不足や入学資格・修業年限の弾力化の問題もあり、平成13年度設置の大学院医歯学総合研究科でのさらなる改善を期待したい。

2) 教育内容面での取組

臨床系大学院生を基礎系講座に2年間派遣し、基礎医学系の指導教員と連携した研究指導体制をとっていることは、基礎研究の推進に極めて重要な役割を果たしている。

教育内容面での取り組みでは、大学院教育といえる体制にはなく、多くの場合各講座の運営に任せられ、総合的な対応とはなっていない。

3) 教育方法及び成績評価での取組

他大学からの入学生の多いこと、外国を含めた他大学との交流など評価できることは多いが、改善すべきことも少なくない。

4) 教育の達成状況

この項の報告内容のほとんどが、現状への反省と改善の提案であり、素直に現状の問題点を明らかにして、改善したいという意欲が感じられ、改善に大いに努力して欲しい。

5) 学生に対する支援

奨学金など研究科だけでは解決できない問題が多いが、学生の増加のためにも、就職や生活相談など研究科として対応できることは、組織としての対応を検討して欲しい。

6) 教育の質の向上及び改善のためのシステム

新潟大学医学教育ワークショップは教員の意識改革において役立っているが、研究科として独自の教育の質の向上及び改善のためのシステムについては、確立されたものはなく、教育活動の評価をはじめ、システムの確立のための計画から検討する必要がある。

2. 総合的評価の概要

報告書では、学位の合否基準は他大学と比較してかなり甘いなど、現状に対する批判的な記載が多く、4年間での学位取得ができない学生の増加など、改善すべき問題がかなり多い印象を受ける。これらを組織としてどのように改善してゆくのか、早急に検討する必要があるのではないか。平成13年度から大学院医歯学総合研究科では、本報告に記載されたさまざまな問題点を解消し、さらに発展させた大学院を作り上げるよう努力して欲しい。

